

た ち ば な

宝清寺

春のお彼岸

(三月十八日から三月二十四日)

日本独特の仏教行事であるお彼岸の本来的意味は、どういふものでしょうか彼岸とは昔のインドの言葉である「パーラミター」(波羅蜜多)の漢約で、「到彼岸」を略したものです。到彼岸とは、彼の岸に到るといふ意味です。「此岸」(こちら側)を悩みの多い迷いの世界とすれば、「彼岸」は悩みのない悟りの世界です。春分の日をへさんだ前後七日間は、彼岸(悟りの世界)へ渡るための修行の期間なのです。それがお彼岸の本来の意味なのです。

「お焼香の心がけ」

香は仏さまの供養として大切なものです。焼香の香りは仏さまを供養すると同時に、焚く人の心を豊かにし、心を清らかにし、ゆつたりとした気持ちにします。また、心を静めストレスの多い現代の人々の心を和らげてくれます。仏さまのご供養として焼香するにあたっては、まず第一に心をこめて丁寧に焼香するよう心がけることが大切です。お客さまに対して、お茶をお出しするにあたっては、まず美しく清潔な茶器を用意するのが礼儀です。そして、丁寧に焼香を入れてさしあげます。それと同様に、仏さまは最高の知恵と慈悲をそなえた方ですから、お客さま以上に心をこめて丁寧に焼香を扱うことが第一です。香りによい伽羅、沈香、白檀のようなものを中心に香を選べば一番よいのですが、高価なものですから少量でも良い香りのものを用いたいものです。

「焼香は炎を出さない」

香でもお線香でも焚くにあたっては炎を出さないよう心がけます。お線香に火をともしるときに炎が出てしまったときには、手のひらで風をおこして炎を消します。決して息で吹き消すことはしません。お焼香も香炉に炭をとり、その上に香を置いて焚くのです。炭の上には灰をかけ直接火の上に香を置かないように焚くのがコツです。炎を立てることなく、ほのかに香りが漂うような焚き方が香の匂いを最高にだすコツです。

換言すれば、彼岸とは仏さまの教えを実行することでもあります。仏さまの教えを実行することを「彼岸に渡る」と言います。難しい仏教書をたくさん読んで、仏教の知識をいっぱい詰め込んで日々の暮らしの中で、人生の途上で仏さまの教えを身で行い、心に生かすなければ何にもならないのです。

わが家の仏教

日蓮宗を知る①

日蓮宗で重んじるお経は、日蓮聖人の名のいわれは、等々

宝清寺客殿・たちはな会館・東屋にて
四月五日(月)十時～三時まで
茶会・箏曲の会

主催・国際ソロプチミストあきる野
昨年九月四日の宝清寺多目的ホールたちはな会館の落慶法要には多数の方々のはご臨席を賜り盛大に挙行することができました。厚くお礼申し上げます。その後たちはな会館は法事の後の会食や葬儀にご利用戴いておりますが、利用された方々からは立派な施設だとお褒めのことばを多数戴いております。さて、このたび地元奉仕団体国際ソロプチミストあきる野の申し出により、たちはな会館を中心として、宝清寺の全施設を使用して「茶会と箏曲(大師範)」の会が開催されることになりました。会の収益

「お経は」
日蓮宗の所依の經典は、「妙法蓮華經」です。一般には、「法華經」と縮めて呼ばれています。その「法華經」は、全部で八卷二十八品あるとされています。品とは章のことです。二十八品あるということになります。「法華經」は、お釈迦様の説かれた教えで、膨大な經典の中でも最高の教えとされているものです。実際、日蓮聖人は、「法華經」こそが最高の教えと確信していました。「法華經」は時やさまさまな比喻によって表現されており、文学的な感動さえ与えてくれます。「法華經」の他に日蓮宗で重んじるお経には、「無量義經」(「法華經」の開經)と「観普賢菩薩行法經」(「法華經」の結經)があります。この三つのお経を「法華三部經」と呼んでいます。

「南無妙法蓮華經」と「南無阿彌陀仏」の違い

分かりますか。お題目と「お念仏」の違いということになります。念仏とは地域の奉仕活動のために使用する予定になっていることと、大規模の大きな会になるものと推察しています。当山としても地域の方々にお役に立つ多目的ホールとして建設した趣旨にもあうものと判断し、微力ながら協力させて戴く事に致しました。この会にはどなたでも参加できることですので、お茶や箏曲に関心のある方がありましたら、お茶券(四五〇〇円・点心(昼食)付き)が用意してありますのでお電話にてお申し出さるようお願いいたします。

「日蓮」の「蓮」は蓮華の「蓮」をとつたとされています。

日蓮聖人の名

日蓮聖人が「日蓮」と名乗るようになったのは建長五年(一二五三)、場所が清澄山でした。「日蓮」の「日」は日輪すなわち、太陽を想い、「法華經」の「神力品」の「日月の光明の能くもるもの幽冥を除くごとく……」の經典から「日」をとつたとされています。また「日蓮」の「蓮」は蓮華の「蓮」をとつたとされています。

浄土宗の宗祖である法然上人は、阿彌陀如来の誓いを信じ「南無阿彌陀仏」と唱えれば、いかに罪が深く、おろかな人間であつても、すべての苦しみから救われ安らかな生活を送ることができ、死んだ後は、極楽浄土に生まれることができると説きました。「南無妙法蓮華經」は、「妙法蓮華經」に帰依(心から従う)という意味です。日蓮聖人は「南無妙法蓮華經」と唱えれば、仏と私達のこころとが交流し、この身がそのまま仏になることができる、と説いています。

「日蓮」の「蓮」は蓮華の「蓮」をとつたとされています。

「日蓮」の「蓮」は蓮華の「蓮」をとつたとされています。